

関 係 機 関 長 殿
病 害 虫 防 除 員 殿
調 査 員 ・ 情 報 員 殿
農 業 資 材 販 売 等 関 係 者 殿

奈良県病虫害防除所長

平成29年度病虫害発生予報 第2号（6月予報）の送付について

このことについて、下記の通り発表しましたので送付します。安全・適正な防除についてご指導をお願いします。

今月の発生に注意を要する病虫害

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
カキ	カキノヘタムシガ	やや早い	やや多い
	チャノキイロアザミウマ	平年並	やや多い
	炭疽病	平年並	やや多い
	円星落葉病	平年並	やや多い
チャ	もち病	平年並	やや多い
	チャノホソガ	平年並	やや多い
いちご	ハダニ類	平年並	多い
野菜・花き類	アブラムシ類	平年並	やや多い
ハウレンソウ	アザミウマ類	平年並	やや多い
ネギ	ハモグリバエ類	平年並	やや多い
キク	白さび病	平年並	やや多い

近畿地方の向こう1ヶ月（5/27～6/26）の気象予報では、平均気温は平年に比べ高く、日照時間と降水量は、平年並の見込みです。

6月1日～9月30日は農薬危害防止運動の重点実施期間です。農薬のラベル記載事項の遵守と使用履歴の記帳、ドリフト対策の徹底、薬剤の適正な保管管理等、農薬適正使用について指導の徹底をお願いします。

農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。以下のような作物間ではいずれも農薬登録内容が異なりますので、特に注意して下さい。

○トマトとミニトマト

○ピーマンとシシトウ

○さやいんげん（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）といんげんまめ（成熟した種子を収穫するもの）

その他、判断に迷った場合には、各農林振興事務所または病虫害防除所へお尋ねください。

I. 普通作物

1. 水 稻

(1) 苗立枯病、苗立枯細菌病、苗腐敗症（もみ枯細菌病）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並（平坦地域）

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、平坦地域の苗床での発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 高温管理等が発病を助長しますので、施設やトンネル育苗では日中の温度管理に特に注意します。
- 2) 育苗は、排水および通気性を確保して、高温管理を避けます。発生した育苗箱は処分または隔離します。

(2) ばか苗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、中山間地域の本田での発生は認められていません。
- 2) 近年、中山間地域の本田において本病が発生しており、菌密度が高まっている可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は見つけ次第抜き取って処分します。
- 2) 育苗時に多発した場合は、次年度必ず全ての種子を更新します。

(3) いもち病（葉いもち・苗いもち）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、中山間地域の本田での発生は認められていません。
- 2) 6月の降水量は多いと予想されており、発生を助長させる恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 中山間地域では、オリゼメート粒剤を箱施用した場合には6月上旬以降に、ブイゲット箱粒剤、Dr.オリゼ箱粒剤等の長期残効型薬剤を処理した場合には7月上旬頃にいもち病が初発する可能性がありますので、早期発見と早期防除に努めます。但し、箱施用剤の残効期間は、天候や施肥量によって前後するので注意します。
- 2) 置き苗は伝染源となりますので、必ず早めに裏返して水没させ処分します。
- 3) 昨年度に奈良県内でQ o I 剤（嵐箱粒剤など）耐性菌の発生が確認されています。Q o I 剤の効果が著しく低い場合には、各農林振興事務所または病虫害防除所へご連絡ください。

(4) ツマグロヨコバイとウンカ類（セジロウンカ・ヒメトビウンカ）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、苗代でのツマグロヨコバイとヒメトビウンカの成虫の発生は認められていません。
- 2) セジロウンカの予察灯への飛来は5月末現在、認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 田植え時の箱施用剤にアドマイヤー箱粒剤、オンコル粒剤5等を使用します。

(5) ニカメイガ（第1世代）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) この数年、発生は少なくなっています。
- 2) 発蛾最盛期は6月4半旬と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 第1世代の防除適期は、発蛾最盛日から5～7日目の6月5半旬となります。
- 2) 本種は局地的に発生する場合があります。これまで発生のなかったほ場でも、寄生や被害が見られないか株元を中心によく観察します。

(6) イネミズゾウムシ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 山間部～中山間部の早植え地域では、成虫の発生ほ場率は29%と平年並の発生です。一部ほ場では、要防除水準である株当たり平均0.5頭以上の発生も確認されています。
- 2) 平坦の苗床では食害痕は見られませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 発生が多い地域では、水田をよく注意して観察し、成虫が株当たり0.5頭を超える場合は、体系防除を行っている水田でも追加防除を行います。
- 2) 発生が水田周縁部に限られる場合には、額縁防除も有効です。

(7) イネクビホソハムシ (イネドロオウムシ)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：少ない (中山間地域)

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 越冬成虫の水田への侵入が始まる時期です。昨年度発生していた地域で、移植時にオリゼメートオンコル粒剤を使用した場合は、6月上旬に投げ込み剤で防除します。
- 2) 移植時にアドマイヤーやプリンスを含む箱粒剤を使用した水田でも、残効が切れてから成虫が侵入する恐れがあります。ほ場をよく観察し、成虫もしくは卵塊を発見した場合は防除します。
- 3) 防除薬剤はシクロパック粒剤等の投げ込み剤が省力的です。投げ込み剤の防除適期は成虫侵入、産卵盛期です。成虫や卵塊の発生をよく観察して防除します。

II. 果 樹

1. カ キ

(1) カキノヘタムシガ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 御所市に設置したフェロモントラップによる誘殺数調査では、成虫発生開始が5月12日(御所市)で、発生盛期は25日頃と推定されます。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は6月3日～5日頃と予想されます。適期は調査地との気温差で前後します。カキの生育状況の指標として、「富有」の満開10日後が防除時期の目安となります。ミツバチへの影響を避けるため開花が終了してから速やかに防除を実施します。
- 2) 昨年発生が多かった園地では、6月の防除を徹底し密度低下を図ります。散布1週間後に再度防除を実施すると効果が高まります。

(2) フジコナカイガラムシ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、寄生花（果）率が0.2%でした。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は6月中下旬の若齢幼虫期です。白綿状の卵塊を見かけてから10日後以降に散布むらのないように十分量の薬液を散布します。
- 2) 夏以降はカイガラムシの生育ステージが乱れ、薬剤の効果が表れにくくなるため、今回の防除で密度を十分に下げておくことが重要です。

(3) チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 一部地域では5月中旬以降、黄色粘着板への誘殺数が増えています。

防除上の注意事項

- 1) 6月中下旬に第2世代の発生ピークを迎えると予想されます。
- 2) 6月上旬、6月下旬の防除に加え、昨年度の多発園や被害が目立つ園では7月上旬の追加防除が必要です。

(4) 炭疽病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では新梢への発病は確認されませんでした。一部の園では昨年多発しており、今後の降雨により発生が多くなる可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨期は炭疽病防除にとって最も重要な時期であり、予防散布を徹底します。
- 2) 降雨が続く場合や前年発生園では、基幹防除に加え殺菌剤の追加散布を行います。
- 3) 発病枝は他の新梢や果実への伝染源になるので、必ず切り取って処分します。
- 4) 枝の軟弱徒長は発生を助長するため、徒長枝の多い園地では肥培管理を見直します。

(5) 円星落葉病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 前年秋期の発生状況から、越冬菌密度はやや多いと考えられます。

防除上の注意事項

- 1) 6月～7月上旬が主要感染時期となり、予防散布を適切に行います。
- 2) 前年に多発した園地では菌密度が高まっているため、適期防除を徹底します。

(6) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発病葉率は1.2%でした。

防除上の注意事項

- 1) 若葉上の病斑が目立つ園地では、感染拡大を防ぐため薬剤防除を徹底します。

2. ナ シ

(1) 黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発病葉率4.0%でした。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨期に入り降雨と共に孢子形成が活発になるため、新梢葉の発病状況および気象状況に注意して薬剤散布を行います。
- 2) 薬剤散布は棚上の発育枝葉に薬液が到達するように、十分量を散布します。

(2) 黒星病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発病葉率は4.8%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発病した葉や幼果は見つけ次第必ず取り除き、園内に残さないよう処分します。
- 2) 梅雨期の降雨により発病が増加します。気象状況に応じた適切な防除を実施します。

(3) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、寄生密度の高い園は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤散布は丁寧に行い、散布むらのないようにします。

3. カンキツ

(1) ミカンハダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：少ない

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、平均寄生葉率は1.3%でした。

防除上の注意事項

- 1) 多発園では、同一系統薬剤の連用にならないよう注意し、防除を行います。
- 2) 発生園では、梅雨期間中に晴天が続くと急増することがありますので、こまめに観察し低密度の状態を保つように防除を行います。

4. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類

予報内容 発生時期：やや遅い 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 5月下旬にサクラ、クワ樹への寄生状況について巡回調査を行った結果、チャバネアオカメムシの寄生平均虫数はやや少ない1.3頭/樹でした。
- 2) 水銀予察灯へのチャバネアオカメムシの誘殺数は各調査地点でおおむね5頭以下/日とやや少ない状況です。

防除上の注意事項

- 1) 越冬成虫は全体的にやや少ない発生ですが、山際の園地や一部の常発園では突発的な飛び込みには注意が必要です。
- 2) 飛来がない園での予防散布は、天敵の減少によってカイガラムシ類、ハダニ類の増加につながるなど弊害が大きいため控えます。

5. チ ャ

(1) 炭そ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月第6半旬時点の一番茶葉での発生は平年並です。
- 2) 向こう1ヶ月の気象予報から発生量は平年並と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 開葉期が防除適期になります。

(2) もち病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月第6半旬時点の一番茶葉での発生はやや多いです。

防除上の注意事項

- 1) 炭そ病と同時防除を行います。

(3) チャノホソガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）での5月下旬までの誘殺調査では、発生量はやや多く、発生時期は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 1～2葉開葉期が防除適期です。
- 2) 摘採間近に巻葉が見られた場合は、早めに摘採します。

(4) チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 開葉～2葉期にかけて薬剤防除します。

(5) チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 開葉～2葉期にかけて薬剤防除します。

(6) カンザワハダニ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 一番茶期での発生量は平年並です。
- 2) 向こう1ヶ月の気象予報から発生量は平年並と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 一番茶期に発生した園地では番茶摘採後の防除を徹底します。
- 2) 被覆茶園での被害が散見されます。被覆前に寄生、被害状況を観察し、発生が認められる場合は早期防除を基本とし、被覆前に防除します。
- 3) 薬剤の感受性が低下するので、年間を通じて同一系統薬剤の連用は避けます。

(7) クワシロカイガラムシ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 越冬世代成虫の寄生株率は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 平年の防除適期は6月中旬頃です。多発園では適期防除を徹底します。
- 2) 株の内部に薬液が十分かかる量で散布します。

(8) チャトゲコナジラミ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 一番茶期での発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は若齢幼虫期（成虫発生終息後）の6月下旬頃です。多発園では適期防除を徹底します。
- 2) すそ部を中心に葉裏に良くかかるように散布します。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ（育苗）

(1) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の育苗床調査では、発生ほ場率27%、発病葉率2.1%でした。

防除上の注意事項

- 1) 雨よけ育苗で寒冷紗を被覆した場合には、特に発生しやすいので注意します。
- 2) 梅雨明けまではサンヨール、モレスタン水和剤等による予防散布を行います。サンヨール及びモレスタン水和剤は薬害が出やすいため、雨よけ施設内では散布日を含めて散布後2～3日以内に30℃以上の高温が予想される場合には使用を控えます。
- 3) 発生初期には、上記薬剤の他、ラリー乳剤等のDMI剤およびストロビーフロアブル等のQoI剤等を散布します。
- 4) 薬剤散布前には必ず下葉を取り除き、葉の裏側や未展開葉にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布します。
- 5) 薬剤散布の3～4日後には葉裏の菌そう（白いかび）を観察し、薬剤の効果を必ず確認し、効果が劣る場合は使用を中止して他剤で早急に追加防除します。

(2) 炭疽病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の親株床調査では、発生は認められていません。
- 2) 今後、高温・多湿により発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 育苗床では発生前からの薬剤による定期的な予防に努めます。特に降雨後の防除に重点をおき、予防散布にはアントラコール顆粒水和剤やジマンダイセン水和剤などを行います。
- 2) 発病株や発病ランナーは、見つけ次第周囲の未発病株やランナーと共に除去して周囲に放置せず、密封処分します。その後、直ちに薬剤防除を実施し、以後の発病には特に注意します。

- 3) 多発した場合には、発生部分とその周辺をシートやビニールで密閉し、隔離します。
- 4) 育苗床の雨よけと底面給水や点滴かん水を併用すると、高い防除効果が得られます。

(3) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：多 い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の育苗床調査では、発生ほ場率40%、寄生株率13%でした。
- 2) 6月の気温は高いと予想されており、ハダニの増殖に好適な条件が続きます。

防除上の注意事項

- 1) 収穫後の本ぼはハウスを閉め切って蒸し込み、ハダニを殺した後に株を持ち出します。
- 2) イチゴの雨よけ育苗では、露地育苗と比べてハダニが増殖しやすいので、注意が必要です。
- 3) 薬剤のかかりやすい育苗期間中は、薬剤抵抗性の発達しづらい気門封鎖剤を中心に防除を行います。
- 4) 同一殺ダニ剤の連用は避けるようにします。ダニサラバフロアブル、スターマイトフロアブル、ダブルフェースフロアブルで防除効果の低下が認められる個体群が増えています。薬剤の効果に疑問がある場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。

2. トマト

(1) 葉かび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。
- 2) 密植、多湿条件で発生しやすく、肥効が切れると発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 通風を図って多湿条件を避け、ベルコート水和剤、アフェットフロアブル等で予防します。
- 2) 発病初期には、下葉の罹病葉をすべて摘除し、ほ場から持ち出し処分します。その後1週間間隔で少なくとも2～3回以上、上位葉での発病が止まるまで定期的に防除します。但し、耐性菌の発生を防ぐため同一系統薬剤の連用は避けます。

3. ナス

(1) ミナミキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 露地ナスでは土着天敵のヒメハナカメムシ類が飛来し始めます。有機リン系、合成ピレスロイド系、ネオニコチノイド系、マクロライド系等、天敵に悪影響のある殺虫剤の使用は控えます。

4. ホウレンソウ

(1) ベと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。
- 2) 今後天候不順が続くと、発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) これまで未発生の抵抗性品種でも、発病する可能性があるので十分注意します。
- 2) 今後も天候不順が続くと発生しやすいため、薬剤による予防に努めます。
- 3) 発病株は見つけ次第抜き取り、ほ場周辺に放置せず、埋没又は密封処分します。
- 4) レース 1～10 抵抗性品種で発生が確認された場合には、各農林振興事務所または病害虫防除所までご連絡ください。

5. アブラナ科野菜

(1) コナガ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) フェロモントラップによるコナガの誘殺数は、農業研究開発センター（桜井市池之内）、大和高田市ともに平年並です。
- 2) 一部ほ場で発生が認められています。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統の薬剤を連用しないように注意します。

6. ネギ

(1) ネギハモグリバエ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや多い**

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生圃場率 100%、寄生株率 21%でした。
- 2) 今後、夏にかけて増加期に入りますので、発生の拡大に注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理の効果が比較的高いため、発生初期に処理します。処理薬量が少ないと効果が低いので、ラベルに書かれた濃度、薬量をよく確認して処理します。また定植ネギの場合は、定植前日～定植時に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理の残効は 2～4 週間程度です。そのため、処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合はリーフガード顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかななどの展着剤を加用します。
- 3) ハモグリバエが多発した残さは次の発生源になるため、できるだけほ場の外に持ち出して処分します。また、多発ほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存するため、次作の前にバスアミド微粒剤などを処理します。

(2) ネギアザミウマ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 100%、発生株率 48%でした。
- 2) 今後、気温上昇とともに増加するため、定期的に防除を行います。

防除上の注意事項

- 1) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理でネギハモグリバエと同時に防除します。また定植ネギの場合も同様に、定植前日～定植時に育苗トレイにも灌注処理を行います。
- 2) アルバリン顆粒水溶剤の株元灌注処理の残効は 4 週間程度です。そのため、再発生が見られた場合は登録のある薬剤を定期的に散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかななどの展着剤を加用します。

7. キク

(1) 白さび病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや多い**

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 33%、発病株率 0.8%と平年よりやや多い発生です。
- 2) 今後天候不順により発生がさらに拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 2) 罹病性の品種では、今後の天候次第で上位葉での発生が懸念されます。降雨後に丁寧に薬剤散布を行います。発生初期には下葉の罹病葉を除去後、アミスター20フロアブルの他、アンビルフロアブル、ラリー乳剤等のDMI剤で防除します。ただし、薬剤耐性菌の発生を避けるため、同一系統薬剤の連用は避けます。

8. 野菜類・花き類共通

(1) アブラムシ類（野菜類、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率と平均寄生株率はそれぞれ、イチゴ育苗では50%と8.8%、夏秋ナスでは38%と2.8%、トマトでは33%と0.7%、ホウレンソウでは20%と0.8%、キクでは50%と3.0%でした。ネギおよびスイカでは発生が認められていません。

防除上の注意事項

- 1) モモアカアブラムシやワタアブラムシは薬剤抵抗性の発達が認められています。特にワタアブラムシは九州などでネオニコチノイド系剤に抵抗性の個体群が確認されています。薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。
- 2) 露地ナスでは天敵に影響の小さいウララDF等を使用します。

(2) ハダニ類（ナス、スイカ、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率と平均寄生株率はそれぞれ、夏秋ナスでは13%と0.5%、スイカでは33%と2.0%でした。キクでは発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 露地ナスでは土着天敵に影響の小さいマイトコーネフロアブル、ダニサラバフロアブルを使用します。

(3) コナジラミ類（ナス、トマト）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査での発生ほ場率と平均寄生株率はトマトでは17%と1.3%でした。ナスでの発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 生長点付近をたたいて白い成虫の飛び出しが見られたら、早めに防除します。
- 2) 不要な下葉やわき芽はとり除き、幼虫や成虫のいる葉裏に薬液がかかるように丁寧に散布します。

(4) オオタバコガ（ナス、トマト、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

